資料７

第 45 回中国・四国地区社会教育研究大会　島根大会
参加報告

日時：2023 年 11 月 16 日(木)・17 日(金)

会場：島根県民会館（島根県松江市）

内容

〇アトラクション

・テーマ　　島根で受け継がれる心～地域や世代を超えて大切にしたい、この想い～

・発　表　　島根県立浜田商業高校　郷土芸能部

〇基調講演

・講　師　　千葉大学　名誉教授　明石要一氏

・演　題　　「AI（人工知能）と共存する社会教育の可能性を探る」

〇パネルディスカッション

・テーマ　　「開かれ、つながる社会教育の実現」に向けて

〇第１分科会　　地域づくり×社会教育

〇第２分科会　　福祉×社会教育

〇第３分科会　　子ども×社会教育

〇第４分科会　　社会教育委員×未来

報告者　丸亀市社会教育委員　髙橋　勝子

〇アトラクション「石見神楽」

地元高校生が、演じる神楽は、迫力もあり素晴らしいもので大変感動的だった。高校の中で「郷土芸能部」という部活動として位置づけられ、地域で伝承されていく文化が、大事にされていることが伺える。幼少期から、郷土文化に触れて生活の中で息づいている様子も伝わった。

〇基調講演　「AI と共存する社会教育の可能性を探る」明石　要一氏（千葉大学　名誉教授）

時代の変化に伴う地域や家族の状況の変化の中、社会教育は人づくりまちづくりであることを様々な視点や例から述べられる。福井県の学力が高いとされる特徴は、3 世代世帯が多く、図書館入館者は全国 1 位、子供会の入会 85%以上といった、地域で子どもを育てる意識の高さが伴っている。

学校教育は横軸、家庭教育は縦軸、社会教育は斜めの軸。地域のおまつりなどが関係性を作っていく。

また、多様性や異文化の受容や体験の大切さも語られていた。

なるほどと感じたのが、学びの違い。

学校教育は、判断力（AI 機能）、読み書きそろばん、「雀の学校」

社会教育は、決断力（AI ではできない）、話す力、聴く力、「めだかの学校」

これからの社会教育は、地域を育てる教育が大切。山村留学や廃校の活用など、地域資源の活用を探ることや、今後を見通すことも大切。ウエルビーイング（今が幸福で満たされている状態）も重要。

①やってみる　②ありがとう（つながり）③なんとかなる　④ありのままで

問題意識を持ち、問をつくる、好奇心を持つ。

〇パネルディスカッション

コーディネーター　島根県　教育魅力化特命官　岩本悠氏

おもしろがる、問いをつくる

パネリスト

NPO 法人 KEYS　藤原氏：公民館を拠点。中高生と地域の繋がりづくり

益田市立高津中学校主幹教諭　田原氏：中高生の実行委員会で地域祭りの灯火祭を開催。子どもたちの力を活かし、地域を支える

浜田市魅力化コーディネーター　大地本氏：親子のイベント開催（自然体験、講演会、写真展など）

☆つながりのポイント

・公民館は多様な人々が集まり、声がきける。楽しそうにしていることが種まきになる。

・目的の言語化と共有。WIN=win の関係性が大事。「やりたい」をちょっと背中を押すお

となの立ち位置

・足し算掛け算の補い合う関係。楽しそうにしていて覗いて来る人を引っ張る

☆感想

それぞれの立場を活かした中高生へのアプローチや導きがすばらしい。社会教育としてのネタ、仕掛けがうまくできている。単体プレイヤー的な要素が強いので、今後の広がりや継続、繋がり等に期待したい取り組みである。

〇第 2 分科会　　福祉×社会教育

事例①　北広島町まちづくりセンター

公民館からまちづくりセンターに変革。様々な居場所作りと市民活動に取り組んでいる。おしゃれな外観。地域住民が役割を持ち関わっている様子が伺えた。職員としての役割がしっかりあり、市民の立場は、ボランティアのみなのかは不明。丸亀市のコミュニティセンターとの職員の違いが大きくあるように感じた。公設公営と受け取ったが、住民主体の活動に繋がっていくことが望ましいと思った。

助言者の小坂田先生から多世代のつながり、交流の場となっていること、「となりの達人」として地域の方の出番を作り役割を持ってもらう仕掛けなどの良い点と今後、障がい者への視点も必要とのアプローチがあった。

事例②　雲南市 3C「夢」club

放課後子ども教室の取り組み。特支学級や学校の子ども対象。体験型活動で、専門家が駆使したプログラムを実践。支援の必要な子ども達の社会教育プログラムが欠けていることに課題。有識者（大学教授、研究室）との連携体制をとっている。

子ども教室として特に目をひく活動はなかったが、中学生のインターシップまで活動が広められていることには驚き。また、大人中心のプログラムは、子どもの主体性や自主性に欠けることもあり、子どもの意思や意見も取り込む意識も必要だと感じた。

特化した子どもの対象としていたが、放課後等ディなど支援の場がある中で社会教育の場だからこそ、様々な子がいて関わり合いを持つのもいいのではとも思えた。

小坂田先生から、連携対象として放課後ディ施設や学校、大学、交流として他校の子どもやおとなのつながりづくり（サロン）、これからの社会教育としての連携視点を×農業、×高齢者、×スポーツ、×物（食材等）など様々な角度からの検討も必要と助言。

雀の学校

チィチィパッパ　チィパッパ
すすめの学校の先生は
むちをふりふりチィパッパ
生徒の雀は　輪になって
お口をそろえて　チィパッパ
まだまだいけない　チィパッパ
も一度いっしょに　チィパッパ
チィチィパッパ　チィパッパ

めだかの学校

めだかの学校は　川の中
そっとのぞいてみてごらん
そっとのぞいてみてごらん
みんなでおゆうぎしているよ

めだかの学校は　うれしそう
水にながれてつーいつい
水にながれてつーいつい
みんながそろってつーいつい

めだかの学校のめだかたち
だれが生徒か先生か
だれが生徒か先生か
みんなで　げんきにあそんでる

報告者　丸亀市生涯学習課　課長　谷本智子

１．概　要

（１）研究主題

地域の教育資源（ひと・もの・こと）を活かした人づくり・つながりづくり

（２）アトラクション

○テーマ　島根で受け継がれる心～地域や世代を超えて大切にしたい、この想い～

○内　容　島根県立浜田商業高校郷土芸能部による石見神楽の披露

（３）基調講演

○講　師　千葉大学　名誉教授　明石要一さん

○演　題　AI（人工知能）と共存する社会教育の可能性を探る

○概　要

・今では、昔あった「ナナメの関係」が消えた。学校は「ヨコの関係」を、家庭は「タテの関係」を築くところ。いとことの関係が「ナナメの関係」だったが、今はいとこの数が減ったので、いとこに代わるものが必要である。

・社会教育はまちづくりである。まちづくりに必要な３つの条件は、西部劇を見ているとよく分かる。西部劇で新たなまちをつくるときには、①教会、②学校、③保安官が登場する。①教会は、みんなの不安を解消する場所。②学校は、子どもを育てる場所。③保安官は、安全を確保する役割である。

・地域格差や家庭格差の存在により、子どもの体験量の違いが生まれている。教育困難校で見る子は、15 歳までに季節のイベントも含めた体験ロスをしている。

・これからは、子どもたちに「教える」のではなく「考えさせる」ことが必要。今の子どもたちは自分で決めるチャンスがすごく減っている。決断力は教えられない。体験し、失敗しながら身につけていくものである。このような機会を与えるのは社会教育の役割である。決断することを２歳くらいから体験させ、訓練することが必要である。

（４）パネルディスカッション

○テーマ　　「開かれ、つながる社会教育の実現」に向けて

○コーディネーター　島根県教育魅力化特命官　　岩本悠さん

○パネリスト　　浜田市魅力化コーディネーター　　大地本由佳さん

ＮＰＯ法人　ＫＥＹＳ事務局長　　藤原睦己さん

益田市立高津中学校主幹教諭　　田原俊輔さん

○コメンテーター　　千葉大学名誉教授　　明石要一さん

○概要

・テーマにある「つながる」とは、「人的なネットワーク」と、「次の世代につなげる」こ

との両方の意味を持っている。

・大地本さん：市内高校の魅力化に携わりながら、子どもの育ち、地域の育ちのために尽力している。「つながろうとしない人に対してはどうアプローチしているか？」との質問に対しては、「その人の周りで自分が楽しそうに活動し、いろいろな種まきを行う。そして、その人が興味を示してくれて一歩踏み出そうとするタイミングで声掛けなどを行う。」とのこと。

・田原さん：中学校教諭を務めながら、放課後の子どもの活動などを行っている。子どもたちの笑顔を見ることや、「またやりたいね」という言葉を聞けるように活動を行うとともに、事業を行う際には、目的を言語化し共有することを心掛けている。最近では中・高校生が躍動する姿が飛躍的に増えたと感じている。

・藤原さん：地元の大学に通う現役の大学生。中学生のときに参加した地域リーダー育成研修会で地域のことを学び、高校時代に、現在所属するＮＰＯ法人ＫＥＹＳ（キース）を立ち上げた。現在、地域の子どもたちとかかわる「寺子屋」事業を行っているが、県外大学生が帰省するタイミングで地域とのつながりとつくろうと、「寺子屋」に参加したら帰省費用の一部を助成している。

・人の主体性を高めるために必要なこととして３人が言っていたことは、「その人との関わり方を常に見直すこと」、「伴走支援の距離感を大切にすること」。

・３人の実践を聞いたコメンテーターからは、「社会教育の弱点である、中・高校生をうまく巻き込んでいる」、「３人の仕掛け力がすごい」などの意見が出された。

（５）第１分科会　地域づくり×社会教育

《事例発表①》

○テーマ　深めよう地域の絆「法の郷づくり」～歴史と出合い 人と出会い 未来と出合う～

○発表者　丸亀市飯山南コミュニティ協議会　会長　進和彦さん
　　飯山南コミュニティセンター　藤村ゆかりさん

○発表の概要

地域づくりに住民の主体的参加を促すために取り組んでいる事業として、「法の郷いきいきまつり」「ふれあい交流室「まちライブラリー」事業」「コミュニティだより「法の郷」」の３つを紹介した。

「法の郷いきいきまつり」は、地域の人が同じ時間を共有し、そこで創り出される一体感を感じてもらうことを目的に行っている。

「ふれあい交流室「まちライブラリー」事業」では、たくさんの本と出合える図書館の良さと、気軽に人が集まる集会所の良さの両方をあわせ持つ空間づくりを目指している。

「コミュニティだより「法の郷」」は、身近なニュースや生活に密着した情報をみんなで共有できるよう、また、変わっていくまちの景色やその時代の出来事を言葉と写真で

残すことを目的として発行している。

これらの事業の課題としては、若い人たちのまちづくりへの参画誘導である。

地域を活性化させるために重要なことは、地域社会の持つ良さを見つけ、総力を挙げて支援すること、子どもたちを含めたそこに住む人々に、地域のまつりや各種イベントに参加してもらい、アイデンティティを深めることである。

《事例発表②》

〇テーマ　行政の取り組みを活用した地域の活性化

〇発表者　島根県海士町社会教育委員　永原馨さん

御波地区　元平優里さん

海士町教育委員会　勇木香織さん

〇発表の概要

海士町は 14 地区に分かれており、その内の一つが御波（みなみ）地区である。

少子高齢化が進み、40 年前に小学校が廃校になったこの地区では、小学２～５年生の親子を１年間受け入れる「親子島留学」のほか、全国各地の若者たちが島で滞在しながら働くことができる機会を提供する「大人の島留学」事業などを実施してきた。それらにより、若者や子どもが増えたが、もともと地域で暮らす人たちと都会から来た若者が、お互いにどうかかわればいいか分からないという状況が生まれてきた。

そのような中、令和元年度から令和３年度まで、海士町中央公民館の職員を各地区に担当として割り振り、住民の要望の把握や活動を支援する地区担当制度を設けた。地区担当職員が、新しく来た若者を地域の人に紹介したり、一緒に行事に参画したりすることで、若者たちが祭りや運動会などの地区の行事に参加するようになり、地域の人との交流が深まった。

新たな問題として、人口が増加することにより意見が多様になり、地区として意見をまとめることが困難になってきた。そこで現在は、地区住民二人を、移住者の意見のまとめ役とすることを試験的に行っているところである。

《助言者（山口大学　霜川正幸さん）より》

〇どちらの事例も「つながり」を大切にし、「つながり」から学びを深め、課題を解決しようとしている。

〇飯山南コミュニティ協議会の事例発表について

・「コミュニティだより」自体が、きれい、読む気になる、見やすい、温かい

・「地域課題を提起し、知ってもらう」＝課題の共有と関心づけ

・積極的な「自己開示」と「情報発信」を、紙媒体、ＳＮＳ、メディア等を活用して行う＝「伝えないことには始まらない」

・活動の広がりやマネジメントには、住民間の情報共有や「お互いをよく知る」ことが必要＝お互いの「強み、特長、個性、得意技」や「弱み、不得意」等を知っていると、お

互いがカバーしやすい

・地域での「緩いネットワーク」は必要＝困った時に効いてくる

〇海士町の事例発表について

・「まちづくりの主体は誰か」を明確にし、人材と環境を「学びと実践のプラットフォーム」にしており、地方の教育活性化ともいえる

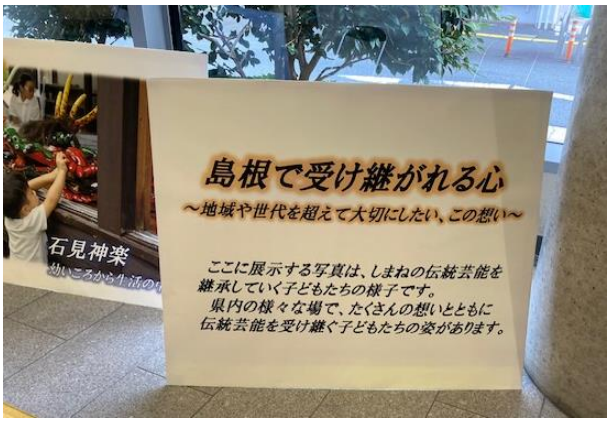
・組織的な取り組みではあるが、つなぐ役割を「人」が担っている。「人」が決め手

・「人」により、人同士、組織同士など異なる他者同士が相互に理解を深め、信頼し合い、互いを支え合える人間関係（協働）へと調整できる力（＝コーディネート能力）や、やる気に火をつける、「自分事化」していくプロセスを支えるなど、活動への意欲や自発性を引き出しながら、意識・行動の変化を促していく力（＝ファシリテーション能力）などが発揮されている

5．所感

島根県立浜田商業高校郷土芸能部による石見神楽は、迫力満点で見ごたえがあった。そう感じたのは私だけでなかったようで、公演終了後は会場の拍手が鳴りやまないくらいだった。出演した高校生へのインタビューによると、小学２年生から石見神楽を舞っているとのことだった。

会場に入る前の通路には、島根県内各市町で子どもたちを対象に行われている伝統文化伝承の取り組みがパネルで紹介されていた。このような取り組みにより、伝統芸能が次の世代に受け継がれていくことは社会教育の目指していることであり、今日の高校生による神楽はその代表的な事例の一つだと思った。



基調講演では、まちづくりのポイントとして、「安心、安全の確保」と、「教育の重要性」が挙げられており、その教育については、「ナナメの関係」を築く場所である地域を舞台として、子どもたちが様々な体験と失敗から決断力を身につけることの重要性が指摘されていた。今後、本市における子どもたちを対象とした社会教育におけるポイントとして気にとどめておきたい。

パネルディスカッションでは、体験活動を中心とした社会教育を実践している方たちの実践内容と思いを紹介していただいた。どのパネリストも、継続のためには「楽しみながら行う」という視点を持っていることと、明確な目的や目指す姿を持ちながらも、実践段階では一人一人に合わせた方法で丁寧に進めていることが印象に残った。

飯山南コミュニティの事例発表に対する参加者の反応としては、特にコミュニティだよりの内容のすばらしさに驚いていたようである。「行政発行の広報と同じくらいのレベルではないか」との声も聞かれた。

飯山南コミュニティにおいて情報発信する際に、行事の結果をお伝えするだけでなく、地域の課題とともに、行事を行った意味もしっかり伝えようとしていることに、コメンテーターからも評価をいただいていたように思う。

海士町の事例発表からは、コーディネーターとして“つなぐ”役割の大切さを改めて感じた。住民の中にコーディネーターの役割を果たす人がいれば問題ないが、そのような人がいない場合は、育成するとともに、行政がその役割を担うことも必要で、市職員としてはだれもが、「調整や、つなぐ役割を担うコーディネーターである」という認識を持っておかなければならないと思う。

このたびの本研究大会への参加は、人づくりに果たす社会教育の大切さを改めて認識する機会となった。また、これまで社会教育に力を入れてきた島根県の数々の取り組みにふれられたことは、貴重な経験となった。

基調講演の中で講師が「子どもの体験活動の量に家庭格差、地域格差が見られる」と言っていたが、「地域格差」というのは私にはなかった視点だったので、この時初めて「丸亀の子どもたちの体験活動の量はどうだろうか？」と思いを巡らせた。

今後も様々な人や団体と連携しながら丸亀の子どもたちに体験の機会を提供するとともに、人やコトをつなげることを意識しながら社会教育やまちづくりを進めていきたい。